第三共和政の危機

――エミール・ゾラのパンテオン葬――

福田（寺嶋）美雪

序

2008年6月4日、パリのパンテオンにて「エミール・ゾラのパンテオン葬100周年」を記念するコロックが行われた。ドレフュスの子孫や政治家、研究者を迎え、政治、歴史、社会、文学と複合的な観点からドレフュス事件とその影響を回顧するプログラムであった。この企画は2006年7月のエコール・ミリテールにおけるドレフュス復権100周年を記念するコロックと連動しており、パンテオン内ではゾラの特別展が開催され、そのポスターが数か月にわたってモニュメントのファサードを飾っていた。2006年から2008年にかけての一連の出来事は、ゾラの死後100余年を経てそのアンガージュマンがどう評価されたのか、またパンテオン内に「国家の偉人」の一人としてゾラが眠っている意味は何なのかを示す、ゾラ受容史におけるひとつの転換点であったと言える。

文学者としてのエミール・ゾラ（1840-1902）の生涯は、新たな作品を発表するたびに巻き起こる非難や中傷との絶えざる闘いであった。若き日にはマネやのちの印象派を擁護する美術批評で物議を醸し、『居酒屋』（1877）や『ナナ』(1880)、『実験小説論』(1880）で一層スキャンダラスな存在となった。『ルーゴン＝マッカール叢書』の作者は、おそらく19世紀においてはヴィクトル・ユゴーと並んでもっとも多く風刺の対象となった文学者であろう。ただし生前の評価は、ロマン主義の象徴的存在であると同時に政界でも活躍し、国葬の後ただちにパンテオンに入ったユゴーとは途方もない差がある。保守派やブルジョワ階級から嫌悪されたゾラの文壇における立場は国民的作家と言うにはほど遠かった。発表する作品には必ず「猥褻」、「下劣」という非難が浴びせられ、そのカリカチュアはつねに豚やおまる、娼婦など、排泄

やセックスのイメージとともに描かれてきた。ところが、晩年に身を投じたドレフュス事件をめぐる論戦、とくに「私は告発する」(1898) の発表によって、ゾラはそれまでの比ではない苛烈な誹謗中傷や身の危険に晒されることになるのである。

アンリ・ミットランの言葉によれば「第三のゾラ」の時期、すなわちドレフュス事件に身を投じ、理想主義的な連作『四福音書』を残したゾラの生涯の最後の 10 年は、軍部が黙殺しようとしていたドレフュス事件に光を当て、フランス近現代史に記憶される歴史的・政治的事件へと転じた長く苦しい闘いに他ならない。のちにサルトルが知識人のアンガージュマンと位置づけたゾラの活動のうち、本論文ではとくに晩年の『私は告発する』の功績を顕彰する目的で決定されたパンテオン葬が呼んだ波紋について考察したい。まずは、事件をめぐる当時の社会的状況を整理し、『私は告発する』およびゾラ裁判が当時の文壇やメディアにどのような影響をもたらしたかを論じる。そしてゾラの死から 4 年経った 1906 年におけるドレフュスの復権とゾラのパンテオン葬が決定した際に、反対派と賛成派が繰り広げた論戦、特に有名なモーリス・バレスとジャン・ジョーレスの議会におけるスピーチを通じて、「パンテオン葬」という儀式に隠された政治的意味を探る。最後に、文学者としては 1791 年のヴォルテール、1794 年のルソー、1885 年のユゴーに続く 4 人目となる 1908 年 6 月 4 日のパンテオン葬の具体的な模様を振り返り、当時のフランス共和国に存在した深刻な社会的分断を、政治的言説と文学的言説の両方から読み解いてゆく[1)]。

Ⅰ.『私は告発する』からゾラ裁判まで

Ⅰ-a) ドレフュス事件のあらまし

フランス史の年表においてドレフュス事件の始まりと終わりを記すとすれば、ドレフュス大尉が 1894 年 12 月にスパイ容疑で逮捕されてから、1906 年 7 月に復権するまでの約 12 年ということになるだろう。しかし 19 世紀末のフランスを覆っていた対独復讐心と反ユダヤ主義の根深さや、第二次世界大戦においてヴィシー政府がナチス・ドイツに協力してユダヤ人迫害を行い、かつ共和国がその事実を認めるのに半世紀を要した事実を考え合わせれば、ドレフュス事件はわれわれが想像するよりはるかに長い間、政治的にも社会的にもフランス共和国を分断した事象と理解すべきである。この複雑怪奇な事件に関する先行研究は無数にあるが[2)]、本論文ではとりわけ、無罪と

なったドレフュスの復権を記念した、ゾラのパンテオン葬がどのように決定され執り行われたのか、またそれをめぐって賛成派と反対派はどのような論戦を繰り広げたのかを確認したい。最初に、ドレフュス事件の発端とその経緯を簡単に振り返っておこう。

1894 年 9 月、パリのドイツ大使公邸の屑籠から、フランス陸軍の軍事機密漏洩を匂わせる紙片が発見される。この物的証拠はドレフュス事件を通じて「明細書（bordereau）」と呼ばれることになるが、その書き手と「特定」されたのがアルザス系改宗ユダヤ人のアルフレッド・ドレフュス大尉であった。10 月にドレフュスはスパイ容疑で逮捕され、12 月には軍部の非公開裁判において満場一致の有罪となる。翌年 1 月 5 日にはエコール・ミリテールで群衆の罵声を浴びながら公的に名誉を剥奪され、仏領南米ギニアの悪魔島に終身流刑となり、そこから自身の無実を訴え続けることになる。しかし 1896 年 3 月、陸軍情報部長として着任したピカール大佐は、事件の再調査に乗り出し、「明細書」の書き手はドレフュスではなく、真のスパイは賭博や豪遊で借金が嵩んでいたエステラジー少佐だとつきとめる。同年 9 月、ピカールは上層部に裁判のやり直しを直訴したが、醜聞が表沙汰になることを恐れた陸軍の将校たちによって、チュニジアに左遷されてしまう。後任のアンリ少佐はピカールとは反対に、「明細書」とドレフュスの筆跡との一致を示す手紙を「発見」し、ドレフュス有罪を裏付ける。実はこれは偽りの証拠であり、アンリ少佐はのちに捏造を告白して獄中で自殺するが、1896 年の時点では反ドレフュス派を勢いづける材料となり、謎めいた事件の真相はいっそう靄の中にかすんでゆくようであった。当初からドレフュスの兄マチューは再審要求運動を働きかけ、ごく少数の賛同者を得ていたが、11 月にユダヤ人ジャーナリストのベルナール・ラザールがドレフュス擁護のパンフレットを発表したことをきっかけに、各メディアは徐々に事件を取り上げ始める。しかし右派と左派ではその報じ方はまるで異なっていた。

当時のフランスでは、ナショナリスト、王党派、カトリック、軍部関係者、そして大多数のブルジョワ階級を中心に、ドレフュス有罪を確信する風潮が圧倒的であった。中でもエドゥアール・ドリュモンの『リーブル・パロール』紙やシャルル・モーラスの『アクシオン・フランセーズ』紙は、事件を受けて創刊された反ドレフュス派の急先鋒であった。とくにベストセラー『ユダヤ的フランス』（1886）の著者ドリュモンは、ドレフュス大尉を「フランスを内から蝕み弱体化させる売国的ユダヤ人」の象徴に仕立て、新聞の一面に数々の風刺画と扇動的な見出しを掲載した。一方、一部の知識人や共和派の

メディア、ユダヤ人コミュニティはドレフュス再審要求運動に賛同したが、共和国への同化を望む改宗ユダヤ人の多くは沈黙を守った。また、本来はナショナリストたちと激しく対立していた社会主義者たちは、ユダヤ金融資本への拒否感ゆえに表立ってドレフュス擁護に回らなかった。ドレフュス派であってもユダヤ人に対しては否定的な人々も大勢存在し、実際にピカール大佐もその一人であった。

反ドレフュス派が世論を支配した背景には、世紀末のフランスを蝕んだ悲観主義やコンプレックスがある。1870年の普仏戦争敗北の屈辱とアルザス・ロレーヌの割譲は、すでに根深いドイツへの復讐心を醸成していた。そもそもドレフュスの所属していた陸軍情報部は、普仏戦争下の諜報戦においてドイツ軍に遅れをとった反省から設置された部署である。自信を喪失したフランス国家は、プロイセンを排除した第3回パリ万国博覧会（1878）、ブーランジェ将軍事件（1886-89）、パナマ運河疑獄事件（1892）[3] を通して、愛国的感情の高まりと共和政への不信感に覆われ、次第に右傾化してゆく。さらに、保守派と共和派やブルジョワ階級と労働者階級の対立、高まる反ユダヤ主義やユダヤ人コミュニティ内部の分裂など、複数の要因や政治勢力が絡み合う混沌とした状況下にあって、再審の実現はほぼ不可能と見えるほどドレフュス派は劣勢に立たされていた。

Ⅰ-b）「私は告発する」からゾラ裁判まで

世間がパナマ運河疑獄事件やドレフュス事件に揺れる中、1890年代のゾラはかつてほど世間を騒がせる存在ではなくなっていた。1893年に『ルーゴン＝マッカール叢書』全20巻を完結し、自然主義という枠組みから脱するように新たな連作『三都市叢書』に取り組む一方で、作曲家アルフレッド・ブリュノーと協同してオペラ制作にも乗り出していた。私生活においては愛人ジャンヌ・ロズロとの間に二児を設け、写真や自転車などの新しい趣味にのめりこみ、老年期を迎えた作家の活動は公私ともに新たな局面を迎えていた。事件を新聞が取り上げ始めた当初、ゾラはさほど関心を示さず、過去の作品で表だって反ユダヤ主義問題を批判したわけでもなかった。カトリック系のユニオン・ジェネラル銀行の破綻という史実を下敷きにした金融小説『金』（1890）では、主人公の投機家サッカールと冷徹で実利的なユダヤ人資本家グンデルマンを、真っ向から対決させている。物語の終盤で、オリエントへの鉄道網敷設という壮大な夢を叶えるはずだったユニヴァーサル銀行の破綻に接したサッカールは、株式相場を急落させたグンデルマンへの

憎悪をむき出しにする。その反面、サッカールに好意を持つ理性的なカロリーヌ夫人は、彼を穏やかにたしなめる。

> 「ああ、汚いユダヤ野郎のグンデルマンめが！　欲がなかったから勝ったんだと！…ユダヤ人はどいつもこいつも頑固で冷酷な征服者なのさ。黄金という絶対権力で国民をひとりひとり買収していき、至上の王国をめざして突き進んで行くんだ。もう何世紀も前からあの民族は、尻を蹴り上げられようが唾を吐きかけられようが、俺たちの国を侵略して勝ちを収めてきたんだ。［…］そうさ、ユダヤ人を毛嫌いするのは俺の身体に染みついたものなんだ。ずっと深く、それは俺という人間の根っこのところにあるんだ！」［…］
>
> 「変わったことをいうのねえ」と、広い知識を持ち、あらゆる者に対して寛容なカロリーヌ夫人は穏やかに呟いた。「わたしにとっては、ユダヤ人だってほかの人たちと同じだわ。あの人たちが違っているというのは、ほかの人たちがそうしたからだわ」[4)]

激昂したサッカールのユダヤ人攻撃は数ページ続くが、これはドリュモンの『ユダヤ的フランス』を始めとして、当時巷に溢れていた国粋主義者たちの言説のパロディにほかならない。一方でカロリーヌ夫人が代弁する「寛容さ」は、後にゾラがドレフュス事件をめぐって発言する際のキーワードでもあり、作家が社会に蔓延するユダヤ人憎悪を懸念していたことは確かである。ただし、賢明なカロリーヌ夫人の言動は物語の大筋にさして影響をもたらすことはない。本作品でゾラは、カロリーヌ夫人の口を借りて
反ユダヤ主義的言説に対して控えめな反論をするにとどめている。

1896 年 5 月 10 日、ゾラはドレフュス事件に関する最初のテクストとなる「ユダヤ人のために（Pour les Juifs）」を『フィガロ』紙に発表する。これはドレフュスの有罪を報じるためにドリュモンが創刊した『リーブル・パロール』紙の扇動的な反ユダヤ主義を批判するために書かれたものだ。記事にはいくつもの予言的言説が含まれているが、とくに冒頭と結びの一節には、第二次世界大戦中に起こるホロコーストを予見したかのようなゾラの憂慮が現れている。

> 数年来、私は、フランスにおいてユダヤ人を標的に試みられている中傷キャンペーンの動向を、驚きと嫌悪を募らせながら見守ってきた。私

にとってこの様相は奇怪そのものである。奇怪というのは、あらゆる良識、あらゆる真理、あらゆる正義の外にあるものという意味であり、そして行き着く先として、あらゆる人間の祖国を血に染める宗教迫害という最悪の凶事しか考えられない事態という意味だ[5)]。

　このような狂信の回帰、このような宗教戦争への駆りたてが、われらの時代、われらの偉大なるパリを舞台に、われらの善良なる民のあいだに起こりうるということ自体に、私はいつも驚愕を禁じえない。この民主主義と全世界的な寛容の時代、平等、友愛、正義を目指すひとつの大きなうねりが四方から起こりつつある、この時代に！[6)]

その後3年間に発表された一連のテクスト『真実は前進する』は、反ユダヤ主義の過熱に警鐘を鳴らし、人道主義を訴えるゾラの思想の結晶である。「寛容」や「正義」、「真理」や「友愛」はすべて、『ルーゴン＝マッカール叢書』最終巻『パスカル博士』（1893）以降のゾラの文学的テーマであった。1897年12月14日に発表された小冊子『青年への手紙（Lettre à la jeunesse）』では、血生臭い宗教戦争時代にフランスを回帰させかねない反ユダヤ主義者の言説に耳を貸さないよう、20世紀を担う若い世代に対して「普遍的寛容」を呼びかけた。

　若い反ユダヤ主義者たち、ではそんな人々が存在するというのか？　まっさらな頭脳、若い魂のバランスを、すでにこのばかげた毒が狂わせているのか？　まもなく20世紀だというのに、なんという悲しみ、なんという心配の種だ！　人権宣言から100年が経ち、寛容と自由化の崇高な行為から100年が経つというのに、私たちは中世の宗教戦争に逆戻りし、最もおぞましく最も愚かな狂信主義へと退行するというのだろうか！[7)]

『青年への手紙』発表直前の1897年11月、ゾラの人生の転機となる出会いがあった。ドレフュス派の上院副議長シュレル＝ケストネルは、世論を動かす強力な味方を求めてゾラに接触し、ピカール大佐の調査にまつわる資料や証拠を開示したうえで、ドレフュス再審要求運動への協力を求める。それは軍部が、ドレフュスの無実ばかりか真犯人エステラジーの存在を知りながら隠蔽していることを、ゾラに確信させるに足るものだった。ゾラを突き動

かしたのは、「弱者に対する強者の不正」への憤り、そして「真実と正義への情熱」であった。1860年代からジャーナリストとして活動し、メディア戦術を知り抜いていたゾラは、あえて挑発的な文書を新聞に載せて政府と軍部を動かすという戦略を思い立つ。

1898年にようやく真犯人エステラジー少佐は告発され、司法調査が始まるが、1月10日～11日の軍事裁判で無罪となり、「軍部万歳！　くたばれユダヤ人！」という歓呼の声に迎えられる[8)]。これに憤ったゾラは夜を徹して『私は告発する』を書きあげ、急進派の『オーロール』紙編集長ジョルジュ・クレマンソーの所へ持ち込んだ。印刷所は徹夜で作業を続け、1898年1月13日の夜明けからパリじゅうの街角で新聞は飛ぶように売れた。エステラジー釈放の日に一気呵成に書き上げられた臨場感のある文体、一切のイメージを用いず一面を丸ごと「大統領宛の公開書簡」で埋める大胆なレイアウトなども手伝い、『オーロール』紙は異例の10刷を重ね、累計30万部を売り上げる。ゾラは『私は告発する』において、複雑な事件の全体像を分析したうえで、陰謀を仕組んだ軍部と司法の関係者や、真犯人を知りながら事実を隠蔽した将校たち、たとえばメルシエ将軍、ボワデッフル将軍、ビヨー将軍、ゴンス将軍などを名指しで告発し、またドレフュスに不利な結論を下した3名の筆跡鑑定人をも糾弾している。

> 以上のような告発を行いながら、私は、1881年7月29日施行の出版法第30条、第31条に定められた名誉棄損罪に問われかねない立場にあることを重々承知しております。法の裁きには、むしろ喜んで身を委ねる所存です。［…］私の情念としては、ただ一つ、人類の名において光明を求める気持ちのみでございます。多難の道を歩んだ末に、今、ようやく幸福への権利を手にした、この人類の名において。この燃え上がる抗議の文面は、私の魂の叫びにほかなりません。私を重罪裁判所に引致されたい。そして、白日のもとで審理を行っていただきたい」[9)]。

1881年7月の新聞法の改正により、新聞における個人名を挙げての誹謗中傷は禁止されていたが、ゾラはこれを逆手にとってあえて実名での告発を行った。侮辱罪で重罪裁判所の審理にかけられれば、法廷でドレフュスの無実と軍部の欺瞞を直接訴える機会となり、またその声は必ずや傍聴人の証言や新聞各紙を通じて拡散されることを見越していたのである。実際に『私は告発する』はイギリス、ドイツ、オランダ、ロシアなどヨーロッパの国々で

も翻訳されるが、反仏感情も手伝って熱狂的に支持され、ゾラは国外から多くの激励の手紙を受け取った。1898 年 2 月 21 日、ゾラは狙い通り侮辱罪の罪でヴェルサイユの重罪裁判所の法廷に立たされ、弁明の機会を得る。

> 「陪審員の皆さま、私をごらんください。私は、買収された人間、嘘つき、裏切り者の顔つきをしておりますか？［…］私は、人生を著作に捧げてきた一介の自由な物書きであります。明日にでも自分の本来の持ち場に戻り、中断された仕事にふたたび取りかかりたいと思っている、ひとりの作家であります。私をイタリア人と呼んで憚らない人々の愚かさは言うに及びません。フランス人を母とし、ボース生まれの祖父母、その力強い大地の農夫たちの手で育てられた私、7 歳で父を亡くし、54 歳にしてはじめて、ある作品の取材のためにイタリアの土を踏んだ、この私を指してイタリア人などと。［…］百歩譲って私がフランス人ではないとしましょう。その場合、私がフランス語で書き、世界中に何百万部と行きわたらせた 40 冊の本は、私をフランスの栄光に与るところのあった一人のフランス人とみなすために、まだ不十分であると言うのでしょうか」[10)]。

「イタリア人の父」をもつ自らのルーツに対するゾラの言及は、『私は告発する』を発表後、『プチ・ジュルナル』紙から亡き父をめぐるスキャンダルをすっぱ抜かれ、反ドレフュス派からの格好の攻撃材料とされたことが影響している。しかしゾラは、自らを「フランス語で書いたフランス人作家」であると表明した。同時に、一作家であろうとも真実の追求のためならば政治家に比肩する発言力を持つという信念を陪審団に向けて、というよりその言葉を聞く法廷中の聴衆に訴えたのである。ゾラの言動において、文学者としての自己とドレフュス派としての自己が矛盾なく結びついていることに注目したい。というのも、まさに「一介の物書き」としてのゾラと、「『私は告発する』の著者」としてのゾラ、一人の人間が持つ二つの側面をどう解釈しどう位置付けるかが、死後のパンテオン葬において議論の焦点となるからだ。

法廷に出入りするゾラの馬車は、激昂して罵声を浴びせる反ドレフュス派の群衆に取り囲まれ、身の安全さえ危ぶまれた。侮辱罪の最高刑である 1 年の禁固刑と罰金刑が確定すると、ゾラは同年 7 月から翌年 6 月まで、ジャーナリストのエルネスト・ヴィゼットリの助力を得てイギリスに亡命した[11)]。この間に『私は告発する』を宛てた反ドレフュス派のフェリックス・フォー

ル大統領が急死する。1899 年 6 月 3 日、破棄院が 1894 年のドレフュス裁判の判決を無効と決定したため、ドレフュスは悪魔島から召喚され、ゾラも急遽帰国することになった。1899 年 8 月、レンヌの軍事裁判所にてドレフュスの再審が行われ、再び有罪となるものの、「情状酌量の余地あり」として大統領エミール・ルーベの特赦を受けた[12)]。この 2 か月後には、ドレフュス再審のために尽力したシュレル = ケストネルが死去している。1900 年 12 月、ドレフュス事件にかかわるすべての司法問題に特赦が下され、ドレフュス派はようやく一応の勝利を収めた。しかしドレフュス本人は、この政治的解決に納得せず、引き続き無罪を訴えた。1902 年 9 月 29 日、ゾラは就寝中に一酸化炭素中毒で不慮の死を遂げ、ドレフュスの名誉回復を見届けることはついになかった[13)]。

Ⅱ．ゾラのパンテオン葬をめぐる論争

Ⅱ-a）　ドレフュス事件をめぐる文学者たち

これまで見てきたように、19 世紀末から 20 世紀の初頭まで、ドレフュス事件の真実をめぐって世論が二つに割れた十数年の間、議会やサロン、新聞、小説そしてカリカチュアなど、あらゆる表現手段と媒体を用いて、ドレフュス派と反ドレフュス派は互いに譲らず即時的で攻撃的な論戦を繰り広げていた。この時期に量産されたイメージとテクストの総体を把握するのはきわめて困難だが、風刺画家カラン = ダッシュ（本名エマニュエル・ポワレ）の《家族の夕食》は、大社交界から労働者階級に至るまで、社会のあらゆるレヴェルで深刻な亀裂が生じた「二つのフランス」の有様を的確に描いている（図 1）[14)]。ゾラ裁判の直前、1898 年 2 月 13 日の『フィガロ』紙に掲載されたこの絵のひとコマ目では、紳士淑女たちが食卓を囲み「とくにドレフュス事件の話はせずにおこう」という家長の言葉を聞いている。ところが、「…彼らは話題にした！」というふたコマ目では、親族同士の取っ組み合いの喧嘩が始まり、食卓がひっくり返る大騒ぎになっている。この絵はユーモラスに誇張してあるが真実を捉えている。実際、ジュール・ヴェルヌ父子のように血の繋がった家族がドレフュス再審をめぐって対立し、険悪な関係に陥った家庭も少なくなかったのだ。

ゾラが自然主義文学理論を展開する 1870 年代から 1880 年代にかけて親しくしていた何人かの文学者は、いつしか反ユダヤ主義的立場からドレフュス有罪を主張するようになっていた。たとえば、かつては文壇の先輩だったエ

ドモン・ド・ゴンクール、アルフォンス・ドーデとレオン・ドーデの父子、ポール・ブールジェ、親友のアンリ・セアール、「メダンの夕べ」に集った弟子でカトリック作家に転向したユイスマンスなどである。1870年代にゾラが美術批評家として擁護した印象派のドガやルノワール、幼馴染のセザンヌも反ドレフュス派として知られる。さらにゾラは事件以前から、のちの反ドレフュス派（ドリュモン、ジュール・ルメートル、フェルディナン・ブリュヌチエールなど）の批評家たちと、自然主義の文学理論をめぐって深刻に対立していた。ドレフュス事件をめぐって真にゾラと共闘したのは、『責苦の庭』（1899）の著者オクターヴ・ミルボーであった。『私は告発する』をきっかけに、文学者や知識人たちは、再審を要求する人道主義的な「人権同盟」と、ドレフュス有罪を確信して結束する国粋主義的な「フランス祖国同盟」の二派に分かれて論戦を繰り広げることになる。

図1　Caran d'Ache, « Un dîner en famille », « Le Figaro », 13 février 1898.

反自然主義の文学者で、その後ゾラの心強い味方となったのは、当時の文学アカデミーにおける唯一のドレフュス派、アナトール・フランスのみである。かつて『ルーゴン＝マッカール叢書』第15巻『大地』（1887）が発表された際、アナトール・フランスは農民を不当に貶め「獣性」を誇張した猥褻な作品として、当時の数々の批評のなかでもとりわけ辛辣な批判を『ル・タン』紙に掲載した[15)]。しかし1902年10月5日、ゾラの葬儀においてこの大作家は美しい追悼演説を捧げ、その記念碑的な作品の数々とともにドレフュス事件に際しての人道的行為を「人類の良心を体現した」と称えている。

「ゾラの文学作品は巨大である。［…］その大掛かりな形式が全体的に明らかになった現在、作品にみなぎる精神もまた認識させる。それは善良さという

精神である。ゾラは善良だった。彼にはすぐれた人間にそなわる偉大さと素朴さがあった。［…］晩年の作品において、ゾラは一貫して熱烈な人類愛を表明し、より良い社会を洞察し、予言しようとした。［…］ゾラを羨もう。彼は巨大な作品と偉大な行為によって祖国と世界の誇りになったのだから。ゾラを羨もう。彼の運命と心は彼にもっとも偉大な天命をもたらしたのだから。ゾラは人類の良心を体現したのである」[16]。

ここで言及される「偉大な行為」とは、とくに『私は告発する』の発表とそれに続くゾラ裁判を指している。1898年1月から2月にかけてのこの事件は、前述の通り無数の媒体と手段で報じられ、ドレフュス派と反ドレフュス派、いずれに与する知識人にも大きな影響を与えた。とくにシャルル・ペギーやダニエル・アレヴィ、マルセル・プルースト、アンリ・バルビュスら、のちに20世紀前半を代表する左派の作家たちは、熱心に再審要求運動のために働きかけた。

1898年以降の事件の状況を詳細に記した史料としては、ドレフュス派の政治家でゾラのパンテオン葬にも尽力したジョゼフ・レーナックの『ドレフュス事件の歴史』がある[17]。同じくゾラ裁判を熱心に傍聴したマルセル・プルーストは、初期作品『ジャン・サントゥイユ』の断章において、メルシエ将軍、ボワデッフル将軍、ゴンス将軍などの実名を挙げながら、社交界をも揺るがす一大事件としてルポルタージュ風に裁判の様子を描き出した[18]。再審要求運動の当事者としてではなく、一世代後の作家として文壇の先達がドレフュス事件から受けた影響を調査したのが、ロジェ＝マルタン・デュ・ガールの半自伝的な長編小説『ジャン・バロア』（1913）である[19]。これらの作品には、事件の関係者たちが実名で登場するが、プルーストやマルタン・デュ・ガールにとって、史実そのものの正確な叙述は主目的でなく、ドレフュス事件を通した自己の内面についての思索が真の関心事であった。

事件や人物名の改変が施されているものの、明らかにドレフュス事件の翻案と読めるイデオロギー小説も書かれた。たとえば、アナトール・フランスはフランス社会を痛烈に批判した風刺小説『ペンギンの島』（1908）において、「八万束の秣事件」という長い章を挿入し、ペンギン陸軍で横領の罪に問われた「ユダヤ人ピロ」をめぐる陰謀を描き出している。秘密裁判で有罪とされるピロはドレフュスを、ピロの無罪を主張して民衆の憎悪の的となる作家コロンバンはゾラを、そしてコロンバンの影響でピロ事件の渦中に飛び込む天文学者ビドー＝コキーユはアナトール・フランスその人をモデルとしてい

る[20]。ドレフュス事件によってあぶり出された、共和国に蔓延する反ユダヤ主義と強者による弱者の迫害という問題を、より徹底的に扱ったのはゾラの『四福音書』第3巻『真実』（1903）である。死後出版となった本作は、ユダヤ人の小学校教師シモンが教会の陰謀で、ある生徒の殺害犯として終身流刑になり、後任の主人公マルクが友人の冤罪を晴らすためにあらゆる政治的・社会的圧力と闘って真実を明らかにする、という筋書きだ。これはドレフュス事件においてゾラが果たした役割そのものであり、マルクはもちろんゾラの代弁者として描かれている[21]。

史実を下敷きにした小説の難しさは、事件が風化するほど作品の持っていた熱度や風刺性が薄れ、作者の実体験を共有しない後世の読者にはかえって古めかしく難解に感じられることだ。『ジャン・バロワ』や『ペンギンの島』、『真実』などの作品群は小説として作者の意図した成功を収めたとは言い難い。しかし、プルーストは『ゲルマントのほう』（1921）や『ソドムとゴモラ』（1922）において、フィクションの一要素として『失われた時を求めて』の物語世界にドレフュス事件を組み込むことで、ベル・エポックの社交風景の客観的な描写に成功している。ゲルマント家に象徴される保守的な大社交界のサロンと、スワン夫人が牽引するドレフュス派のリベラルなサロンとが対比され、社交界の勢力図は徐々に塗り替えられていくのだ。また、1898年に起こった『私は告発する』とゾラ裁判という一連の事件は、フランスで長い伝統を持つ法廷小説や犯罪小説といったジャンルにも、「容疑者」、「真犯人」、「弁護人」、「裁判官」などの人物類型のモデルや、筆跡鑑定などの犯罪捜査の手法を、新たな物語の素材として提供した。

Ⅱ－b）　パンテオン葬のスキャンダル

ゾラの死後に、ドレフュス事件は新たな政治的展開を迎えた。1902年6月、反教権主義派と急進的共和派は、二党の提携によって政権をとる。彼らはフランス共和国の新たなヴィジョン、すなわち長らく議論されていた国家と教会の分離を実現すべく、1905年12月に政教分離令を発令してライシテ（非宗教性）の原則を示し、信教の自由を保障した。この間、クレマンソー首相の主導でドレフュス事件の再調査が行われることになる。1904年3月、破棄院（最高裁判所）はドレフュス事件の再調査を開始し、1906年7月12日にレンヌ裁判の判決を破棄、ついにドレフュスの名誉が回復された。その翌日、共和派のジュール＝ルイ・ブルトン、ジャン・ジョーレスほか左派の議員の連名によって、ゾラをパンテオンに移葬する法案が下院に提出され、賛

成 316、反対 165 で可決された。法案を提出する際、ブルトンは「ゾラは『私は告発する』という閃光をほとばしらせ、無実の人のみならずフランスを救った」と述べており、ドレフュス事件における功績がパンテオンに値すると主張している。共和主義や社会主義の勢力は、ドレフュス復権がかなった時期を逸さずゾラをパンテオンに「列聖」することで、愛国主義に傾く世論を牽制し、政権を盤石なものにしようと考えたのである。10 月 25 日、共和国首相に就任したクレマンソーは、かつて陸軍上層部の陰謀により失脚したピカールを陸軍大臣に任命した。

10 年以上にわたってフランスを二分したドレフュス事件はついに大団円を迎えると見えたが、根強い右派の反対によって、上院での決議や予算承認は幾度も遅れ、パンテオン葬実現には二年以上待たなければならなかった。1885 年のユゴーのパンテオン葬はほぼ満場一致で可決されたことや、1907 年 3 月には上院議員マルスラン・ベルトロが、死後わずか 1 週間でパンテオンに入っていることを踏まえれば、ゾラに「国家の偉人」という称号を与える政治的行為にどれほどの反発があったかが窺える[22)]。パンテオン移葬が決定するや否や、『ルーゴン＝マッカール叢書』の著者が 52 人の偉人とともに「列聖」されることへの激しい拒否感を表す風刺画が巷にあふれた。その多くは、ゾラの作品のタイトルを掲げ、小説の登場人物たちを戯画化したものである。晩年のゾラは『三都市叢書』や『四福音書』などの理想主義的な作品を発表していたが、20 世紀の初頭になっても人々がゾラの名から連想するのはつねに『ルーゴン＝マッカール叢書』の作品群であった。まるでパンテオンが突然、ゾラの創造したグロテスクな登場人物たちに侵略されるかのような、「冒涜」の感覚を当時のカリカチュアは示している。それも道理で、パンテオンには 3 名の文学者よりもはるかに多くの軍人、すなわちゾラが『私は告発する』で断罪した陸軍関係者の祖先たちが祀られていたのである。ゾラのパンテオン入りを拒絶する、カンブロンヌ将軍やランヌ元帥などのナポレオン軍の英雄たちが描かれた風刺画もある[23)]。

ゾラのパンテオン葬を扱ったカリカチュアの中で、『居酒屋』や『ナナ』、『大地』と並び好んで想起されたのが、『ルーゴン＝マッカール叢書』の事実上の最終巻となる第 19 巻『壊滅』(1892)、すなわち普仏戦争におけるフランス軍の潰走と第二帝政の崩壊を描いた戦争小説であった。たとえば《壊滅》という絵では、ゾラの登場人物たちがヒステリックな狂気にかられてパンテオン目指して駆け出しており、《ナナ》という絵では、裸のままで悠揚とパンテオンのドームに肘をつく、おしろいをぬりたくった巨大なナナが描かれ

ている。《彼の遺灰のパンテオン移葬》と題した絵葉書では、『居酒屋』の労働者クーポー、『大地』の農民イエス＝キリスト、『ナナ』の娼婦ナナと『ジェルミナル』の炭坑婦ラ・ムケットが、ゾラの羽ペンとインク壺、本などの遺品を担いでパンテオンの石段をよじ登っている（図2）[24]。ところがペンが刺さっているのはインク壺に見せかけたおまるなのだ。要約すれば、フランス軍の屈辱的な敗北や下層階級を描いた自然主義作家はパンテオンの栄誉に値しない、というメッセージなのである。これらのカリカチュアはいずれも、右派のメディアが報じる言説を視覚表現に置き換えたものだ。1906年から1908年にかけて、「二つのフランス」の対立を浮き彫りにしたのは、もはやドレフュス本人ではなくゾラの名とその作品群であった。

図2 Peka, « Translation de son Reste au Panthéon », carte postale en 1908

パンテオン移葬をめぐる論争の焦点は、二つに絞ることができる。ゾラは「祖国の偉人」に値する文学者か、そしてゾラの人道的功績は第三共和政の理想を体現するのか、という問題である。『ルーゴン＝マッカール叢書』の著者を評価するべきか、それとも『私は告発する』の著者を評価するべきなのか？　前者に関しては、すでにパンテオンに眠るユゴーや、パンテオン入りをしていない19世紀の文豪たちとの比較がなされ、後者に関しては『私は告発する』の意義が取り沙汰されるが、とくに問題とされたのはゾラの作品の文学的価値であった。パンテオン葬を支持するドレフュス派の知識人や議員たちは、自身がゾラの作品をどう受容していたにせよ、自然主義は猥褻で不道徳だという1860年代から変わらぬ非難に対して抗弁しなければならなかった。1908年4月16日の記事で、アナトール・フランスはパンテオンの栄誉は、小説家ゾラではなく、『私は告発する』の執筆者ゾラに与えられるものであり、議会の決定がゾラの文学的価値を不滅のものへと高めるわけではないと主張している。

単刀直入に書こう。パンテオン埋葬の名誉は、小説家ゾラにではなく、

> 市民（citoyen）ゾラに対して与えられるべきである。どんな民主的な政府といえども、ゾラはバルザックやフローベール以上の名誉に値するとは言えまい。どんな閣議にも、どんな議院にも、こうした区別をする権限はない。しかし、共和国政府のみが、ゾラが偉大な市民行為を成し遂げたかどうか、ゾラが祖国に貢献したかどうかを語り得るのだ。このような考えを、より明快に表現しよう。ゾラをパンテオンに祀ることを私が求めたのは、ひとえに公開書簡『私は告発する』を書いたがゆえである。彼の作品がどんなに偉大であろうとも、文学者の間で永遠の論争の的になることに変わりはない。しかし、『私は告発する』によって彼が成し遂げた行為は、万人が理解できるものであり、不滅の手本として生き続けなければならない[25)]。

アナトール・フランスは、『大地』発表時の批判からもわかる通り、つねにゾラの文学性については一定の留保をしてきた。パンテオン葬を１か月半後に控えたこの記事と葬儀の際の弔辞に流れているのは、作家ゾラというよりも「市民（citoyen）ゾラ」への敬意と共感の念である。アナトール・フランスにとって、『大地』の著者ゾラは決してバルザックやフローベールに比肩する文学者にはなり得なかった。ここから、ユゴーとゾラのパンテオン葬の意味合いの違いが見て取れる。ユゴーはまさしく共和国を象徴する国民的作家として祀られたが、ゾラのパンテオン葬は「作家その人」と「遺した作品」、1898 年以前と以後の活動を区別して考えることが議論の前提とされた。ドレフュス派は『私は告発する』以降のゾラの功績は自然主義作家としてのそれを遥かに上回ると評価し、反ドレフュス派は『私は告発する』以前のゾラが到底パンテオンに値しないと反撃した。いずれにせよ、未だ評価の定まらない『ルーゴン＝マッカール叢書』の存在が議論をいっそう複雑にしている。共和主義者や社会主義者たち、外国人読者には熱心に読まれても、アカデミーや公立図書館、ブルジョワ家庭からは拒絶されたゾラの作品は、死後もなお激しい毀誉褒貶に晒されていた。

Ⅲ．パンテオン葬と終わりなきドレフュス事件

Ⅲ-a）　モーリス・バレスとジャン・ジョーレスの論戦

右派の政治家や知識人にとって、ドレフュス事件は破棄院による無罪判決で終わってはならなかった。彼らは相変わらず、ドレフュスを「裏切り者の

ユダヤ人」と呼び続け、当然ゾラのパンテオン改葬に何らかの正当性を認めることも拒絶した。右派の反対キャンペーンの代弁者となったのは、幾度となく新聞に抗議記事を書いた作家のモーリス・バレスであった。1908 年 3 月 19 日、下院においてゾラのパンテオン葬に必要な特別予算 3 万 5,000 フランの拠出が審議される。すでに 1906 年 12 月の上院の決議によって、パンテオン葬の実行は確定していたが、十分な議論が尽くされないまま繰り延べになっていたものだ。バレスはこの機に乗じて、再び右派の議員たちを結束させ、政権の中枢を成す左派に打撃を与えようと試みる。記録に残されている当日の議論は、このようなバレスの先制攻撃から始まった。

> 「みなさま、ここにゾラのパンテオン葬のために 35,000 フランの支出が求められています。私が思うに、これは倹約をする最良の好機ではないでしょうか。（*極左と左派からの怒号。右派の拍手と笑い。*）私の立場は明確です。私はドレフュス派ではありませんし、法廷でメルシエ将軍を擁護しました。しかしここで問題を再燃させる気はありません。ドレフュス事件は脇に置くとしましょう。単純に、ゾラとその作品そして、彼の美質全体を議論したいと思います。（*右派からの拍手。極左からの野次。「勝利したのは正義と真実だ！」*）」[26)]

右派からの喝采と左派からのブーイングを浴びるバレスは、最初から「ドレフュス事件は脇に置く」と発言して主導権を巧みに握り、議論の焦点を 1870 年代から 1880 年代にかけての自然主義作家ゾラの文学性へと意図的にずらしている。そして、伝統的なパンテオン葬では政府主導で様々な祝祭を催し、軍隊のパレードを行うことを喚起したうえで、『ルーゴン＝マッカール叢書』は諸外国において、フランス国家のイメージをいたずらに歪め、貶めていると主張した。

> 「あなた方が列聖しようとしているのは、我が国のさまざまな階層を巨大なフレスコ画として描くことに、そのキャリアを捧げた人物であります。『大地』では農民を、『居酒屋』では労働者を、『ボヌール・デ・ダム百貨店』ではデパートの店員を、『ごった煮』ではブルジョワを、そして『壊滅』では兵士を。だまし絵の技巧で仕上げたこの壮大なパノラマは、われわれに真実を示すという名目で描かれましたが、事実は逆で、絵空事を濫用し、偽りと中傷に満ちています。これらの作品は、フ

ランスの外でなんという害悪をわれわれにもたらしたことでしょう！友人たちが異国において、わが国の風俗についての悪評を払拭するのにどんなに苦労していることか知らねばなりません。ゾラの作品のせいで、世界中がわれわれの社会の美徳を見くびっているのです」[27]。

続いてバレスは巧妙にも、キャリアの終盤を迎えたゾラは、作品の発行部数以上に輝かしい名声の獲得を目論んだと挑発し、「馬車が来た、飛び乗ろう！」[28] とドレフュス事件を利用しただけで、『私は告発する』はパフォーマンスに過ぎないと主張する。また、ドレフュス事件以前から反自然主義の知識人、たとえばフェルディナン・ブリュヌチエールやジュール・ルメートルが繰り返しゾラに浴びせてきた攻撃、すなわち誤った科学主義や作品の不道徳性といった批判を反復しながら、共和国がパンテオンにゾラを葬ったという事実を、後世の若者がどう判断するかという疑問を議場に投げかけた。

この日の議会で右派と左派が交わした応酬には、ゾラの名が想起させるさまざまなドレフュス派や反ドレフュス派の文学者の名や作品名がこだまし、第三共和政下においてどんな作家がどのように読まれていたか理解する手がかりを与えてくれる。たとえばバレスがゾラの作品の猥褻さを非難すると、すかさず左派のシャルル・デュモンやアレクサンドル・ゼヴァエスが、反ドレフュス派のポール・ブールジェの『嘘』（1887）やバレス自身の『ベレニスの園』（1891）は不道徳ではないのかと反撃する。また、バレスがゾラの文学理論は生理学者ベルナール・ラザールの敷き写しに過ぎず、ヴェルヌの小説と同じく非科学的だと断定すれば、急進派のレオンス・レヴローがヴェルヌは十分に科学的だと野次を飛ばした。レヴローはゾラの良き読者と見え、『ナナ』の娼婦たちは「共和主義者」として描かれているというバレスの難癖に対しても、ナナは「ボナパルト派」だと即座に訂正している。逆に、左派がゾラの座右の銘「一行モ書カヌ日ハ一日モナシ（*Nulla Dies Linea*）」を想起してその仕事量を称えると、たゆみない執筆が功績になるならばバルザックを移葬すればよい、という野次が右派から飛んだ。

この日のバレスは徹底して、あらゆる作家や作品の名をゾラに不利になるように解釈し引用した。アナトール・フランスの『大地』に対する有名な批評文さえも想起している。これに対し、左派の議員たちはゾラの葬儀におけるアナトール・フランスの弔辞を引用することで反駁した。一方でバレスには意図的な言い落としも多々見られ、イタリア系というゾラの出自を非難し、アカデミーに立候補し2度落選したという過去を掘り返すものの、レユ

ニオン島出身のルコント・ド・リールやキューバ出身のジョゼ・マリア・エレディアなどのアカデミー会員の存在には一切言及していない[29)]。

議論の終盤でゾラ擁護に立ち上がり、バレスと真っ向から対峙したのは、パンテオン葬のために尽力した中心人物の一人、社会主義者ジャン・ジョーレスであった。バレスは議会を味方につけるために、「国民的作家」ヴィクトル・ユゴーを引き合いに出し、それに比して『ルーゴン＝マッカール叢書』の著者がいかに共和国を貶めたかを強調したが、対してジョーレスは、ゾラをユゴーの共和主義精神の正当な後継者と称え、ユゴーのロマン主義文学に流れる進歩と社会正義の理想を、ゾラの作品と生涯が体現したことを議員たちに想起させた。

> 「皆様、これは死してなお物議を醸すことを名誉によって授けられた、まったく羨むべきゾラの運命です。彼の闘いの生涯はこうして死後も続き、美しい統一を完成させるのです。［…］しかし皆様、このようにしてエミール・ゾラのうちにある、偉大な文学の労働者と偉大な市民とを区別しようとすることを受け入れるべきではありませんし、またそれはできない話です。文学の労働者として、市民として、ゾラは真実を求める熱烈な闘士でしたし、まさにこの真実に対する情熱的な愛こそが、彼の作品とその生涯に深い統一性をもたらしているのです（*右派からのさえぎり。左派と極左からの拍手*）」[30)]。

文学者ゾラと市民ゾラを切り離すべきではないというジョーレスの論理は、パンテオンに祀られるべきは作家ではなく『私は告発する』のゾラだとするアナトール・フランスの立場とも、ドレフュス事件において果たした役割はともかく『ルーゴン＝マッカール叢書』のゾラをパンテオンに祀るべきではないとするバレスの立場とも明らかに異なっている。そして真実への情熱故に成し得た「芸術」と「人生」の統一ゆえに、ゾラは「祖国の偉人」にふさわしいというジョーレスの主張は、かつて1898年2月のヴェルサイユ重罪裁判所において、「一作家」としてまた「一市民」として真実を追求することを陪審団に宣言したゾラの姿勢とも一致している。そして、作家としてのゾラと『私は告発する』のゾラを不可分の存在として評価することこそ、1908年時点においてゾラのパンテオン葬を後世に至るまで正当化するもっとも説得的な論拠だったのであろう。ジョーレスは最後に、共和国がしかるべき儀式を執り行うことの意義をこう説いた。

「いま一度申し上げますが、この投票は、ゾラが芸術と人生を分けたのではなく、真実への情熱においてそのふたつを結び合わせたことを意味するでありましょう。この投票は、もし正しいものであれば、モーリス・バレス氏が求めるように、偉大なる民衆がその深遠なる過去を忘れず、その大地と死者たちに名誉を与えること、祖国の伝統を恣意的に損なうべきではないこと、そして博識で革命的で、明晰な天才もまた、こうした伝統の一部であることを意味するでしょう。またこの投票は、芸術の役目がいかに高尚であろうと、芸術特有の形式がいかに明確であろうと、現実と人生との接触によって新たにされることをも意味するでしょう。[…] 民衆は本能的に、ゾラの作品の内に、真実の探求者の内に、闘いにおける同志の内に、そのことを認めているのであります。ですから紳士諸君、我々は制限や留保をつけることなく、政府との合意に基づいて、偉大な記憶を祝うこのパンテオン改葬に、フランスの真髄にふさわしい民衆のあらゆる力、あらゆる豊かさを注ぐことを求めます」[31)]。

この力強いジョーレスの答弁は熱烈な共感と万雷の拍手を呼び、議会はすぐさま決議に移った。賛成 344、反対 144 で過半数を超えたため、儀式の特別予算 3 万 5,000 フランは下院にて可決された。2 年前にパンテオン葬が可決された時よりも 30 票近く賛成票が増えており、この点にジョーレスの熱弁の影響を認めることもできるだろう。ただし、上院が予算の承認決議を引き延ばしたために、4 月 2 日のゾラの誕生日に予定されていた儀式は、6 月 4 日に延期となった。

Ⅲ-b） 望まれざるパンテオン葬とその帰結

パンテオンでの儀式が行われる数日前の 1908 年 5 月 30 日、風刺新聞『ラシエット・オ・ブール』は、早くもセレモニーの風刺画を掲載した。パンテオンへと向かう招待者たちの行列が一ページごとに並んで歩く、コミカルに演出された連作である。先頭にはアルマン・ファリエール共和国大統領が描かれ、その後ろにはバレスを含む政府の要人や議員、アカデミー会員たち、裁判官、大学人、陸軍学校の士官候補生たちが続く。行列のしんがりには、ほかの人々からぽつんと離れて「彼（lui）」、すなわちアルフレッド・ドレフュスがいる。キャプションには「私はゾラのモニュメント建立に 100 フラン寄付したのだから、儀式に出席する権利があるはずだ」と書かれている[32)]。事件の当事者だったにもかかわらず、あまりに長く続いた事件とゾラ

のパンテオン葬というエピローグは、老いたドレフュスの存在をほとんど疎外して進んだのである。4日後の儀式はまさにカリカチュアが示す通り、もものものしい雰囲気の中で行われたが、『ラシエット・オ・ブール』の風刺画家も予想しない結末が待っていた。

ゾラのパンテオン改葬は、二日にわけて行われた。まず1908年6月3日夕方、モンマルトル墓地からゾラの遺灰が掘り出され、パンテオンに移された。立ち会いは妻アレクサンドリーヌとゾラの二人の遺児など、近親者と親しい友人に限られた。棺はショセ＝ダンタン通り、リヴォリ通り、サン・ジャック通りなど、ゾラの作品の舞台にもたびたび登場した界隈を通過してスフロ通りに到着したが、パンテオン周辺では反ドレフュス派との小競り合いが起こり、ゾラの友人が杖で殴られる事態にまで発展した。路上には反ドレフュス派たちの「くたばれユダヤ人！　くたばれゾラ！」という怒号と、それに答えるドレフュス派たちの「ゾラ万歳！」の声が響いた。凱旋門をくぐってパリ市内を練り歩き、沿道にあふれる群衆の弔意を受けたユゴーのパンテオン葬とはまったく異なる、殺伐とした緊張に満ちた風景がそこにはあった。1908年6月4日の儀式を報じる保守派の新聞は、なおもパンテオン葬への嫌悪感を露わにしている。ヴィクトリアン・サルドゥーは、『ル・ゴーロワ』紙において「パンテオンが家具付き宿屋と化した」と嘆き、ルイ・ロランは『ラ・クロワ』紙上で、「パンテオンが乗合馬車（omnibus）に成り下がった」と書き立てた[33)]。

6月4日午前、共和国大統領アルマン・ファリエール、ジョルジュ・クレマンソー首相、その他政府要人らの列席のもとに埋葬の儀式がとり行われた。ユゴーのパンテオン葬の時にも演奏された《ラ・マルセイエーズ》から始まり、ゾラがアルフレッド・ブリュノーと制作したオペラ《メッシドール》の序曲、など、ベートーヴェンの交響曲第三番《英雄》二楽章の「葬送行進曲」など、死者にゆかりのフランス革命の精神を表す楽曲が演奏された[34)]。しかし追悼演説を行ったのは、後の共和国大統領で当時の公教育省大臣ガストン・ドゥメルグただ一人であった。ユゴーのパンテオン葬における演説者は16名であったから、ゾラの儀式には不自然な政治的配慮が働いていたことがわかる。さらに、厳戒態勢の広場の周りでは、あらゆる手段で儀式の進行を阻もうとするナショナリストたちの激しい抗議運動が行われ、聖職者を含めて200人以上の逮捕者が出た。これらの騒動をかき消すかのように、ベートーヴェンの交響曲第九番《歓喜の歌》の最終楽章、そして軍歌《門出の歌》が演奏され、正午前には儀仗兵の行進によってセレモニーは締め括ら

れようとしていた。ところが突如、65歳のジャーナリスト、ルイ・グレゴリがパンテオンの敷地に入り込み、参列していたアルフレッド・ドレフュスに向けて2度発砲するという事件を起こしたのである（図3）[35]。

図3 « Arrestation de Gregory, homme de lettres après son attentat contre Alfred Dreyfus »

儀仗兵の行進や大統領を迎えるピカール将軍の様子など、わずかに残るセレモニーの記録写真は、絵葉書などの形でフランスの国内外に当時の様子を視覚的に伝播させていった。しかし切り取られ固定化されたイメージの外側では、激しい抗議デモの声が響き、グレゴリの発砲事件が起こっていたのだ。1発目の弾丸はドレフュスの右腕をかすめ、2発目は右肩を傷つけたが、幸い命を奪うまでには至らず、グレゴリはその場で逮捕された。エコール・ノルマルの卒業生で、『ル・ゴーロワ』紙で軍事問題を担当するグレゴリの発砲事件は翌日の新聞で大々的に報じられた。ドリュモンの『リーブル・パロール』紙やモーラスの『アクシオン・フランセーズ』は早速彼の「英雄的行為」に賛辞を送っている。ドレフュスの友人フェリックス・フロワサールはその回想録の中で、グレゴリ事件と右派の報道への驚きと嫌悪を綴っている。事件の2日後にフロワサールと会った女性の12歳の一人娘は、報道を聞いて「ああ、弾丸が心臓を貫いていればよかったのに！」と無邪気に叫んだという[36]。1908年9月10日に、セーヌの重罪裁判所で裁かれたグレゴリは、自分はアルフレッド・ドレフュス個人に対してではなく、ドレフュス再審要求運動に対して引き金を引いたのだと釈明した。フロワサールが記録した『エコー・ド・パリ』紙の報道によれば、グレゴリは後悔の念を一切示さず、「同じ機会が訪れたらまた引き金を引くだろう、パンテオン葬は我々への挑戦だった」とも語った。驚くべきことに陪審団は、殺人未遂や謀殺未遂の罪に問うこともなく、「愛国的行為」と判断して、翌日グレゴリを無罪放免した[37]。

明らかにゾラのパンテオン葬は、ユゴーの祝祭的なそれと異なり「望まれざる儀式」であった。それはドレフュス事件の美しいエピローグなどではなく、「二つのフランス」の終わりなき相克を知らしめる出来事に他ならなかっ

た。公的にドレフュス事件の終結を 1906 年 7 月 12 日、あるいは 1908 年 6 月 4 日と記すことはできるが、それはあくまでも政治的な幕引きが行われた日付に過ぎない。引き続く様々な事件や第一次世界大戦は、ゾラのパンテオン葬が国内に渦巻く反ユダヤ主義や盲目的な愛国主義の高まりを牽制する力を持たなかったことを示している。長い、あまりに長いドレフュス事件の結末を見届けることができた関係者はほとんどいない。先に述べたように、シュレル＝ケストネル上院副議長、エミール・ゾラ、ベルナール・ラザールなど、再審要求運動の立役者たちは、ドレフュスの復権とパンテオン葬という結末を見届けることはなかった。最も熱烈なゾラの擁護者であったジャン・ジョーレスは、第一次世界大戦勃発前夜にパリのカフェで暗殺され、いまはゾラと同じくパンテオンに眠っている。そして『私は告発する』を『オーロール』紙に掲載し、パンテオン葬に尽力したジョルジュ・クレマンソーは、第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約においてドイツに苛烈なほどの強硬姿勢を示し、皮肉にも第二次世界大戦の遠因を作った。おそらくドレフュス事件に揺れる第三共和政を生きた誰しもにとって、事件の全体像を俯瞰しその先の未来を予見することは不可能だったろう。事件の歴史的意味を絶えず問い直すのは、後世に生きる我々の仕事なのである。

結び

これまでエミール・ゾラのパンテオン葬をめぐる経緯を振り返ることで、共和国フランスに内在する対立やドレフュス事件の歴史的位置づけを再考してきた。二つの世界大戦と五月革命を経て、ドレフュス事件やパンテオン葬の記憶は一時的に風化するが、今日の共和国フランスにおいて、ゾラがパンテオンに眠ることの正当性に異議が唱えられることはもはやない。エミール・ゾラを評価するにあたり、文学者ゾラと『私は告発する』のゾラ、どちらかの側面を意図的に切り離して語る者もいない。ドレフュス派と反ドレフュス派の知識人や政治家は、いずれも後世によって一定の歴史的評価をくだされている。1996 年のアンドレ・マルローのパンテオン葬、そして 2002 年のアレクサンドル・デュマのパンテオン葬の演説において、当時の共和国大統領ジャック・シラクはごく自然にゾラの名を引き合いに出し、その人道的功績を想起している。しかし、ドレフュス事件をめぐってゾラの書き残したテクストや、事件が文学にもたらした影響、パンテオン葬をめぐって知識人が闘わせた議論、数々のカリカチュアや記録写真が示すのは、長年にわた

る「二つのフランス」の対立が生んだ遺恨の深さである。第三共和政がゾラのパンテオン葬を通して盤石なものにしようとしたライシテの原則や人道主義は、21 世紀に相次ぐテロ事件とその反動としてのナショナリスムの急激な高まりによって、再び危機に晒されている。あたかも今なお現代社会にドレフュス事件の深い爪痕が残り、パンテオン葬の日のナショナリストたちの怒号の残響が聞こえてくるかのようである。

最後に、パンテオンではなく、もうひとつドレフュス事件の記憶を継承する役割を担う歴史的建造物について触れておこう。パリ近郊のメダンに現存するゾラの館では、作家の死の翌年から毎年 10 月の第一日曜日に「ゾラの巡礼」と題した記念式典が催されている。2002 年、没後 100 周年の節目の年には、共和国大統領ジャック・シラクがスピーチを行い、ドレフュス事件におけるゾラのアンガージュマンを想起した。2016 年には、メダンの館の修復を記念してやはり共和国大統領フランソワ・オランドがスピーチを行っている。そして 2018 年秋には、建物の一翼が「ドレフュス記念館」に改修され一般開放されることになっている。生前のゾラが望んだ通り、作家としてのゾラと市民ゾラの足跡は、メダンの地においてひとつに結びあわされた。そしてその名がひとり歩きするなかで事件から疎外されていったドレフュスその人の記憶もまた、メダンの館に留められることになったのである。ことドレフュス事件に関しては、パンテオンもメダンの館も単純に記念碑としての役割を担うだけではなく、現代社会に生きる人々が繰り返し過去の歴史的記憶に立ち戻り再考すべき場所として存続し続けるだろう。

※本論文は、JSPS 科研費 JP26770122 および JP16 K13208 の助成を受けたものである。

注

1) 本論文は、2017 年度日本フランス語フランス文学秋季大会ワークショップ、「パンテオンと作家たち」（2017 年 10 月 29 日、名古屋大学）における発表に基づいている。発表に当たり数々の示唆をいただいた竹内修一氏（北海道大学）、田中琢三氏（お茶の水女子大学）に深く感謝する。また、本稿の執筆に当たり貴重な助言をいただいた伊達聖伸氏（上智大学）にも併せて感謝申し上げる。

2) ドレフュス事件に関する主なフランス語文献には、以下のものがある。Alain PAGÈS, *13 janvier 1898 J'accuse...!*, Perrin, 1998. Michel DROUIN, *Zola au Panthéon. La quatrième affaire Dreyfus*, Perrin, 2008. また、日本語文献としては以下を参照されたい。稲葉三千男『ドレフュス事件とエミール・ゾラ　告発』、創風社、1999 年。菅野賢治『ドレフュス事件のなかの科学』、青土社、2002 年。

3) パナマ運河建設をめぐる汚職事件には、ユダヤ人資本家のレーナックとエルツが深

くかかわっていた。すでにドリュモンの『ユダヤ的フランス』が焚きつけていたフランス国内における反ユダヤ主義は、パナマ運河疑獄事件を機に支配的な勢力となり、2年後に右派のメディアがドレフュス事件を報じた際にあらゆる反ユダヤ主義的言説が噴出することになる。

4） ゾラ『金』、野村正人訳、『ゾラ・セレクション7』、藤原書店、2003年、532-533頁。

5） Émile Zola, « Pour les Juifs », *Le Figaro*, 16 mai 1896, *L'Affaire Dreyfus.* « J'accuse...! » *et autres textes* (éd. Henri Mitterand), Le Livre de Poche, 2010, p. 48. 以下、ドレフュス事件をめぐるゾラのテクストはすべてこの版を典拠とする。

6） *Ibid.*, pp. 53-54.

7） Émile Zola, « Lettre à la Jeunesse », 14 décembre 1897, *ibid.*, p. 88.

8） その後もエステラジーは事件の責任を追及されることなく平穏な人生を送ったばかりか、反ドレフュス派にその存在を利用され、ドリュモンの「リーブル・パロール」紙に寄稿するジャーナリストとしても活動した。

9） Émile Zola, « J'accuse... ! », *L'Aurore*, 13 janvier 1898, *ibid.*, p. 140.

10） Émile Zola, « Déclaration au Jury », *L'Aurore*, 22 février 1898, *ibid.*, pp. 160-161.

11） ヴィゼットリはイギリスにおけるゾラ作品の紹介者として重要な役割をした人物であり、ゾラ裁判の直後にはゾラとドレフュス事件をヴォルテールとカラス事件になぞらえる記事を『ウェストミンスター・ガゼット』紙に発表している。Voir Ernest Vizetelly, « Calas and Dreyfus, Voltaire and Zola », *The Westminster Gazette*, January 19 1898.

12） この裁判中には、ゾラ裁判の弁護人も務めた、ドレフュスの弁護人フェルナン・ラボリが銃撃されるという暗殺未遂事件が起こっている。

13） ゾラの死の真相は未だに謎めいた部分が多いが、反ドレフュス派による暗殺の可能性がきわめて高いとされる。暗殺説の根拠と容疑者については、アラン・パジェスが具体的な検証を行っている。Voir *Guide Émile Zola*, Alain Pagès et Owen Morgan (éd.), Ellipses, 2002, pp. 169-180.

14） https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/9/90/Caran-d-ache-dreyfus-supper.jpg/1200 px-Caran-d-ache-dreyfus-supper.jpg

15） *Ibid.*, p. 286.

16） Anatole France, le discours d'hommage lors des obsèques de Zola, 5 octobre 1902, cité par Alain Pagès, *ibid.*, pp. 165-166.

17） Joséphe Reinach, *Histoire de l'Affaire Dreyfus*, 7 vol, La Revue Blanche, 1901-1911.

18） Cf. マルセル・プルースト『ジャン・サントゥイユⅡ』、鈴木道彦訳、『プルースト全集12』、筑摩書房、1985年。

19） Cf. ロジェ＝マルタン・デュ・ガール『ジャン・バロアの生涯』、青柳瑞穂訳、『ノーベル賞文学全集8』、主婦の友社、1971年。

20） 『ペンギンの島』は、誤ってペンギンに洗礼を施した聖人の不始末をとりつくろうために、神がペンギンたちを人に変えた、という設定の長編小説である。壮大なペンギン国の歴史物語は、アナトール・フランスの生きた第三共和政下のフランス社会に対する痛烈な批判と風刺に満ちている。

21） Cf. Émile Zola, *La Vérité*, préface de Thierry Paquot, Les Introuvables, 1994.

22） 1907 年 3 月 18 日、人道的な化学者としても慕われたマルスラン・ベルトロは、最愛の妻ソフィーが病死した同日に後を追うように亡くなった。共和国政府は夫婦を引き裂くことをよしとせず、ソフィー・ベルトロはパンテオンに眠る最初の女性となった。見方を変えれば、当時女性を祀ること以上に、ゾラのパンテオン葬は問題視されたのであると言えよう。

23） ランヌ元帥の孫であるモンテベッロ公爵は、ゾラが祖父と同じパンテオンに葬られることを、「フランス軍への侮辱」と表現して不快感を露わにした。

24） Cf. *1908 Zola au Panthéon. Le débat parlementaire sur le transfert des cendres d'Émile Zola au Panthéon*, Assemblée Nationale, 2008.

25） Anatole France, « Émile Zola au Panthéon », *Neue Freue Presse*, 16 avril 1908.

26） Discours de Maurice Barrès à la Chambre des députés, 19 mars 1908, *1908 Zola au Panthéon. op. cit*., pp. 19–20.

27） *Ibid*., pp. 21–22.

28） *Ibid*., p. 32.

29） 1909 年、ジョゼ＝マリア・エレディアの後継としてアカデミー会員に選出されたのは、ほかならぬモーリス・バレスであった。

30） Discours de Jean Jaurès, 19 mars 1908, *ibid*., pp. 49–50.

31） *Ibid*., pp. 54–55.

32） « La cérémonie de la panthéonisation », *L'Assiette au beurre*, 30 mai 1908.

33） Cité par Marc Knobel, « La cérémonie de juin 1908 », *Zola au Panthéon. L'épilogue de l'affaire Dreyfus*, Alain Pagès（éd.）, Presses Sorbonne nouvelle, 2010, p. 35.

34） ゾラのパンテオン葬における音楽の儀式的効果については、ジャン＝セバスチャン・マケの以下の論考を参照されたい。Jean-Sébastien Macke, « Gloire à Zola... Une panthéonisation en musique et en chansons », *ibid*., pp. 41–53.

35） https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Arrestation_Gregori.jpg

36） Édith Guillemont, « Un dreyfusard inconnu : Félix Froissart（1832–1934）, in *Émile Zola, de l'affaire Dreyfus au Panthéon*, Alain Pagès（dir.）, *Les Cahiers naturalistes*, n° 82, Société des Amis d'Émile Zola et Éditions Grasset, 2008, p. 46.

37） ルイ・グレゴリの人物像やパンテオン葬においてとった行動、その後の裁判の経緯は、とくにドレフュス事件の専門家ミシェル・ドゥルアンの以下の著作に詳しい。
Michel Drouin, *Zola au Panthéon : la quatrième affaire Dreyfus*, Éditions Perrin, 2008, pp. 133–163.